特集

常設展示リニューアル 西アジア展示が生まれ変わりました

開館三〇年を機に民博は、展示も変革の時を迎えており、六か年計画で常設展示場の改修を進めている。その第一弾として、アフリカと西アジア展示を一新した。まず今月号で紹介するのは、生まれ変わった西アジア展示。「信仰」、「砂漠のくらし」、「パレスチナ・ディアスポラ」、「日本人と中東」、「音文化とポップカルチャー」という五つの軸を中心に再構成され、旧展示場でおなじみのあのお宝、収蔵庫に眠っていた珍しい資料、近年収集された真新しい品々が、新しい舞台にお目見えした

常設展示改修にあたって

西尾哲夫（にしおてつお）
民博 民族文化研究部
専門は言語学、アラブ研究。現在、アラビアンナイトの形成とオリエンタリズムをめぐる研究に従事。近著に『アラビアンナイト―文明のはざまに生まれた物語』（岩波新書）。

西アジアは四大文明の二つまでをはぐくみ、ユダヤ教、キリスト教、イスラーム教（イスラーム）という重要な宗教をうみだしました。しかしながら日本では、西アジアあるいは中東世界という言葉からラクダやアラビアンナイトを連想する人が多いのではないでしょうか。近代以降の日本人は、欧米というフィルターをとおして西アジアを見てきました。ラクダやアラビアンナイトのイメージは、このフィルターをとおして定着してきたといえるでしょう。

今回のリニューアルでは、西アジアという地域を単独でとらえるのではなく、この地域が、他の地域と歴史的・文化的にどのように関係しあってきたのか、どのような影響をあたえあっているのか、さらには地球規模の変動の中でどのように変容していくのかを中心に、いくつかのサブテーマを設定してみました。

イスラームにもとづく多彩な文化

一部の例外はありますが、西アジアは乾燥気候地帯に属しており、広大な砂漠におおわれています。砂漠の舟とも称されるラクダを飼養する遊牧民たちは、砂漠を舞台とする豊かな生活文化をはぐくんできました。

砂漠のもつ特性は独自の自然観や人間観の発展をうながすことになり、やがてはイスラーム文化の基盤にも影響をあたえたのです。

西アジアで誕生したユダヤ教、キリスト教、イスラームは、人類史に多大な影響をおよぼしてきました。西アジアの各地ではさまざまな文化が発展しましたが、七世紀にアラビア半島で誕生したイスラームは西アジアをおおい、やがてはイスラーム世界が形成されることになりました。

イスラーム世界では宗教上のしきたりにそったさまざまな文化が生まれ、コーラン（クルアーン）の言葉であるアラビア文字を美麗に書くためのイスラーム書道が発展しました。

イランで広まっているシーア派などの分派もありますが、イスラーム世界は共通するひとつの価値観でまとまっているのです。また、最近ではグローバル化の進行にともなって、イスラーム的な価値観をみなおそうとする動きも出ています。

新しい伝統と民族文化にそって

西アジアでは長らく三宗教が共存してきましたが、近代以降に世界システムが組み替えられると状況が一変し、なかでもイスラエルの建国は深刻な問題を残すことになりました。イスラエル建国によって土地を失い、各地に離散したパレスチナ人のあいだでは、伝統的な女性用衣装に代表される民族文化が再認識されるようになっています。

グローバル化のもとで民衆文化も大きく変容してきました。西アジアの各地では、生活の場面ごとに豊かな音文化が受けつがれており、世界的なブームとなったベリーダンスもそのひとつです。アラブ世界の民俗芸能であったベリーダンスは、世界に輸出されたことで質的な変化を遂げ、これを伝統芸能として再評価しようという動きも出てきました。西アジアでは保守と世俗がからみあいながら、日々新しい伝統がつくられているのです。

ペルシアの市場にて

高山 龍三（たかやま りゅうぞう）
京都文教大学元教授
大阪市立大学大学院修了。東京工業大学、東海大学、大阪工業大学教授などを歴任。専攻はヒマラヤ・チベットの民族誌、アジア文明論、近年は河口慧海研究に傾倒している。

兜との再会

二〇〇八年秋、特別展オープニングの日、山中由里子さんからの依頼で、収蔵庫に入った。西アジア展示のリニューアルのため、新たに展示予定のイランの兜に会うためである。それは今から四〇年前、私が収集したものだというのだ。すっかり忘れていたが、そういえばたしかに私が集めたものだろう。

岡本太郎氏の構想で、太陽の塔の地下に、「根源の世界」を表現するための、仮面と神像その他民具を、世界中から集めるプロジェクトがつくられた。泉靖一、梅棹忠夫両先生のもと、若手研究者によって構成されたのが、EEMすなわち「日本万国博覧会世界民族資料調査収集団」である。一九六九年一月、西アジア南アジアを担当した私は、まずイランへ飛んだ。二か月半の間、五か国、二四の都市をまわり、民族資料の買いつけ、梱包、発送など一人でやった。

まず町に着くと、博物館へ行ったり、人に聞いたりして情報を集める。骨董屋や物産展示場など、物色、買いつけ、資料についてのデータを聞きとる。まあそういう行動の連続だった。

イランのイスファハンは京都にも似た古い町だ。車をチャーターして、モスク、広場、バザールを見てまわり、郊外のゾロアスター寺院の廃墟に登ったり、アルメニア派の教会を見たりした。買い物には時間がかかった。ずいぶん交渉したが、言い値の七五パーセントぐらいにしかならない。道を屋根で覆った古いバザール、歩いていると感じないが、じっとしていると寒い。

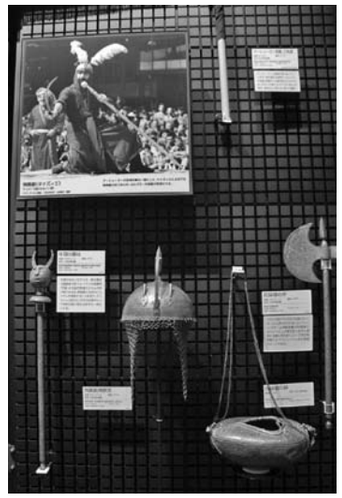
バザールの裏通り、職人がハンマーで鍋を叩いてつくっていた〈イスファハン 1969年冬〉

たしか古いバザールの骨董屋で兜、錫杖、斧を買った。ノートには「イミテーション」と書いてあるので、古いものではない。ノッカー、トルコマンの首飾り、ピストル、ナイフ、火薬入れといっしょに八点六五〇〇リアルで買っている。

その後シーラーズに飛び、ペルシア帝国の首都ペルセポリスを見学、テヘランに戻り、車で雪のエルブルズ山脈を越え、ラムサールで一泊、カスピ海沿岸を廻った。

収集団余話

『EEM』第一章「〈収集団〉から〈博物館〉へ」に梅棹先生は、私が受けた新聞記者のインタビューを紹介されている。ラワルピンディでパキスタン・タイムズの記者が取材に来た。とくに民具については、人間の智恵の展示であり、根源の世界を表現するものだというと、まったくユニークだと言ってくれた。ついでEEMのこと、口がすべって民族学博物館設立計画まで言ってしまう。先生が書いておられるように、当時博物館のことは関係者の暗黙の了解だった。だからおしかりを受けるかもしれないと手紙に書いたのだ。「古民具の展示　日本の専門家収集に」という記事が翌日の同紙に載った。


刷新した西アジア展示の一画。中央下が兜

バザールのなかの金のアクセサリー屋、ウインドウ・ケースを覗いている人たち〈イスファハン1969年冬〉

バザールのなかの通り、両側に骨董屋が並んでいる。天窓から光が射しこんでいるが、冬は寒い〈イスファハン1969年冬〉

旅する楽器

水野 信男（みずの のぶお）
兵庫教育大学名誉教授
東京芸術大学大学院修了。博士（文学）。兵庫教育大学教授、国立民族学博物館教授（併任）などを歴任。専攻は民族音楽学。中東を軸に人と音の多様なかかわりを探求している。

古代のエジプトやメソポタミアの王墓に彫られたレリーフには、さまざまな楽器が登場する。そこでは楽器は、演奏する人物像とともに描かれていて、楽器の形状はもちろん、人がその楽器をどのように奏でたかも、観察できる。またレリーフのほかに、古代遺跡からは楽器そのものも出土している。メソポタミアのウル王墓（紀元前二五世紀）で発見された竪琴は、いまは、イラク国立博物館や大英博物館に収蔵されているが、それらはどれも精巧かつ華麗で、鑑賞者の目をあきさせない。

ウル王墓出土の竪琴（イラク国立博物館蔵）

このように途方もなく古い時代に生まれた楽器は、文明の波にのり、周辺地域に拡散し、農村や都市の人びとのもとで育まれ、洗練されていった。同時にそれらは、西アジア文化圏をこえて、ひろくユーラシア大陸にむけて旅だった。すなわち、歴史の経緯とともに、世界各地に縦横に展開したのである。

サントゥールは東漸して中国の洋琴になり、それは琉球を経て日本本土にも伝来した。一方、このサントゥールやカーヌーンなど、チター系の楽器は、西漸して、ハンガリーのチンバロム、西欧のダルシマー、チェンバロ、ひいてはピアノへと変容した。リュート系のウード（ペルシャ語ではバルバット）も、やはり東漸して中国や日本の琵琶に、西漸してリュートやギターに姿を変えた。このほかにもイランのセタールは、中国の三絃、ついで日本の三味線に、また、葦笛のナーイは、東アジアの竹製の笛（尺八など）に変身した。これらの諸楽器は、たとえその伝播のルートやプロセスが、ときにはっきりしないとしても、その源流の一端が、ここ中東の地にあることだけは、まちがいない。

このほど西アジア展示場に新たに登場した「中東地域の楽器」は、いずれも現代社会を舞台に、現役で活躍中のものばかりである。これら一つひとつの楽器は、たとえばリラ系のシムシミーアが、あのメソポタミアの竪琴をほうふつさせるように、それ自体、過去の伝統を忠実に投影しながら、人びとの暮らしに息づき、多彩な音を響かせている。

楽器をとおして文化・文明の伝播と系譜を紹介する

哀悼の〈かたち〉

山岸 智子（やまぎし ともこ）
明治大学准教授
専門はイラン地域研究、文化論。最近はシーア派ネットワークや「イスラームとグローバル化」といったテーマへの関心を高めている。

シドニーのモスクを訪問したときのこと、一緒に説明を受けていたインドゥと思しき（おぼ）インド人一行は、「ところでアーシューラーはどんな意味があるのか？」と尋ね、トルコ系のモスク管理者を困惑させていた。それほどまでにヒジュラ暦ムハッラム月一〇日（アーシューラー）におこなうシーア派ムスリムの哀悼行事は見た人の耳目を驚かす。

シーア派信徒はカルバラーでヒジュラ暦六一年に悲劇的に殺された第三代指導者（イマーム）を偲び、ムハッラム月一日から一〇日まで、集会や街頭行進で、号泣したり、胸を叩いたり、あるいはわが身を刃物で傷つけて指導者の名前を叫んだりする。集会では韻文・散文でカルバラーでの出来事を朗詠し語るが、演劇形式をとることもある。タァズィエ（殉教劇）である。一九世紀のテヘランでは国立タァズィエ劇場が建設され、王は外国人の賓客も招待して大がかりな哀悼集会を催し、その舞台には最新の自動車や外国大使役なども登場させた。そこからアメリカの研究者にはタァズィエを「前衛的」と評価する者もいるが、私自身がタァズィエを見て前衛的だと思ったことは（残念ながら）ない。

タァズィエの題材は一九世紀から二〇世紀にかけてカルバラーの出来事のみならずイスラーム以前の歴史にまで及ぶようになった。こうしたタァズィエの小道具や関連の品を一新された常設展でじっくり見てほしい。

なおカルバラーの悲劇の絵画表現も無視できない。図1は、一九世紀の作と推定される絵で、顔の描き方にイスラーム陶器などにも共通する特徴が見出される。そして一九世紀後半からは大衆的な「コーヒーハウス絵画」が発展し、街角での殉教語りにも用いられた。（図2）

近年は日本アニメの影響が顕著な例が見られる（図3）一方、ファルシュチーヤーンの近代ミニアチュール（図4）が広汎な人気を博している。カルバラーの悲劇が与えるインスピレーションは、ビジュアル表現にまだまだ展開を促しそうだ。

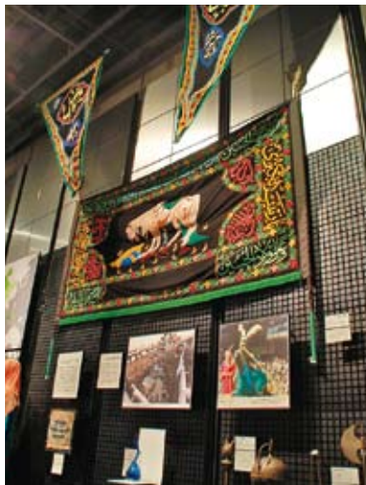
他方、イスラーム法学者は、哀悼の意を示す行為は推奨しつつも、さまざまな表現法に反対の意を示すことが少なくない。聖職者と民衆の創意と葛藤を想像しつつ哀悼の〈かたち〉を見るのも一興である。

図1 カズヴィーンの哀悼行事施設に飾ってあったアリー・アクバル（第3代イマームの息子）の絵 〈19世紀?〉

図2 コーヒーハウス絵画モハンマド・モダッベル作「カルバラーの悲劇」[ヒジュラ暦1325年／西暦1907年]〈レザー・アッバースィー美術館所蔵〉

図3 バハレーンの子ども用雑誌付録の「小さなフサイニー」〈バハレーン2008年〉

図4 イラン現代ミニアチュール マフムード・ファルシュチーヤーン作「アーシューラーの夜」〈テヘラン1976年〉



アーシューラーの際にかつがれる旗など、シーア派の哀悼行事に関連した品々を見ることができる

刺繍から想う パレスチナの故郷

錦田 愛子（にしきだ あいこ）
早稲田大学イスラーム地域研究機構研究助手
総合研究大学院大学修了。文学博士。専門は中東地域研究で、ヨルダンやレバノンにおける離散パレスチナ人の帰属権と帰属意識について研究を続けている。

衣装などの手工芸品は「離散」以前の人びとの生活を語る

西アジア展示の中ほどに設けられた、色とりどりの刺繍ドレスのコーナーは、収集家ウィダード・カワール夫人によるコレクションである。彼女は現在ヨルダンに住むパレスチナ出身者だ。自宅の半地下を収蔵室にあてた膨大な収集品の一部を、民博は買い取った。

パレスチナ・ディアスポラ

それがこのたび「パレスチナ・ディアスポラ」として公開されることになった。

「ディアスポラ」という言葉に、なじみのない方も多いだろう。「離散」を意味するこの単語は、従来、祖国を破壊されたユダヤ人の二〇〇〇年間の放浪を指すことが多い。しかしここでは一九四八年のイスラエル建国により、放浪を終えたユダヤ人の代わりに、故郷を追われることになったパレスチナ人の現状を表している。

刺繍は「ディアスポラ」の前から女性たちの間で受け継がれてきた技法だった。正確な起源をたどるのは困難だが、現存する最も古い刺繍は一九世紀初めの物である。それらはヨーロッパの旅行者や宣教師が持ち帰ったものであり、現在は欧米各国の博物館に収蔵されている。大英博物館は一九六〇～八〇年代にかけて、パレスチナの伝統衣装に関する調査をおこなった。中心となったのは研究員のシェイラ・ヴェイルだが、カワール夫人はその聞き取り調査にも協力をした。

パレスチナの地理が特産品とともに描かれた刺繍（林 博貴氏提供）

アイデンティティとしての刺繍

「衣装は女性の〝パスポート〟であり、着る者のアイデンティティを示す」。二〇年以上前のインタビュー記事で、彼女はそう述べている。農村部で発達した刺繍は、村ごとの特徴を示し、模様のパターンを見ればどこの出身か分かったという。村の手芸品だった刺繍は、後にパレスチナ文化を代表するナショナル・シンボルとなる。日常着として着られる機会は減ったものの、土産物としての役割は拡大しているからだ。外から来た観光客は、「パレスチナ土産」として刺繍製品を手にすることになる。

その売場のひとつとして機能しているのが、エルサレムに店舗を構える「スンブラ」である。ここではパレスチナ自治区各地で活動するNGOに対して、販路を提供している。また日本でも複数のNGOが収入創出事業として製品を輸入している。日本国際ボランティアセンター（JVC）や、パレスチナ子どものキャペーンはそのひとつだ。刺繍製品の作製は、占領下の難民の生活を支える貴重な収入源でもある。厳しい生活をしのぐために布を手にする女性たちは、一針一針に故郷の村への想いを込めているのかもしれない。

第一次インティファーダ（民衆蜂起）期の刺繍は、イスラエルへの抵抗運動の高まりを表す